

私の好きな作家像

三島由紀夫を中心に

六回卒 松原功子

昭和四十五年十一月二十五日、三島由紀夫が自衛隊に乱入して自決してから、私はこれまで彼の文学や、作家としての生き方に関心を持ち、いつか私なりの三島由紀夫像を捉えてみたいと思っていました。

かえりみれば、私の三島文学との出会いは、三島文学の最高峰と言われる『金閣寺』から始まったと言ってもよいと思います。それ以前に読んだ小説も多いはずですが、そのほとんどが記憶に残っていないのに比べると、『金閣寺』だけは明瞭に、読んだという最初の印象もハッキリ残っているからです。特に『金閣寺』の最後の場面、金閣寺を焼失させた主人公が、大文字山の頂きまで来て、ポケットの煙草を喫み、「一ト仕事を終えて一服している人が、よくそう思うように、生きようと思った」と書かれているところは、観念的な青年の世界から、散文的に「生きる」大人の世界へと転じる象徴的な光景として、三島由紀夫という作家を思い出す時にならず浮かんで来る一つのイメージでした。

昭和三十一年『金閣寺』が刊行された年は、私が女子大二年の時でした。やがて私が社会に出る寸前にぶつかった『金閣寺』が、青春文学の傑作と定評されるころの小説だったことを思うと、やはり不思議な出会いというものを感じるのですが、心に深く刻まれて残る文学作品というのは、そういう個人的な条件に大きく左右されるものなのでしょう。

昭和三十一年という年は、石原裕次郎の『太陽の季節』が出た年でもあります。昭和三十三年、私が卒業した年には、大江健三郎が『飼育』で芥川賞を受けています。私の青春時代、学生時代は、まさにこういう戦後の新しい作品、新人が続々と登場を始めた時代でした。世の中は、もはや戦後ではないという意識が人々の中に浸透し、文化面では大衆化、情報化、レジャー化が進み、文学者がスター化し、小説も文学者も、異常に発達したマスコミの中に呑み込まれる現象が始まっていました。三島由紀夫は、こういう時代背景の中で、正統な由緒正しい文学、文体や構成の厳し

い芸術至上主義者としての評価を決定しますが、彼の文学の最高峰である『金閣寺』を境に、その後書く方のエネルギーは低下し、ボクシングや映画出演や、「楯の会」結成などのジャーナリスチックな話題の方で注目を集め、次第に国粹的伝統主義思想の傾向の小説、評論、行動と共に、一般的な読者層は離れる傾向にありました。

しかし昭和四十五年、自衛隊総監室の割腹、介錯などという最期で、再び世間の衆目を集めることになります。昭和四十五年という年は私が小説を書き始めた年にもあたるので、彼の死には、やはり大きな衝撃を受けました。彼の文学、作家活動に大きな関心が再び動きました。「小説とは、本質的に方法論を摸索する芸術である」と三島は言っていますが、私も創作方法で悩まされて、何か役立つことでもないか、など現実的な必要も感じたのでした。

さて、三島由紀夫は大正十四年生まれ、戦前の時代に育ち、文学青年として「日本浪漫派」の影響を受け、昭和十九年十九歳で処女作品集『花ざかりの森』を遺書のつもりで刊行します。遺書のつもりと言うのも、当時の青年達の共通の終末観に近いもので、

「私一人の生死が占いがたいばかりか、日本の明日の運命が占いがたいその一時期は、自分一個の終末感と、時代の社会全部の終末感が完全に適合一致した、稀にみる時代であった」

という状況の中から言われたことです。その形式については、三島由紀夫は文庫形式の『花ざかりの森』の刊行に

当たったの解説で

「一九四一年に書かれたこのリルケ風な小説には、今では何だか浪漫派の悪影響と若年寄のような気取りばかりが目について仕方がない。十六歳の少年は、独創性へ手をのぼそうとして、どうしても手が届かないので、仕方なしに気取っているようなところがある。因みに言うが、本短編集の題名はどうしても『花ざかりの森』としたい出版社の意向によって、私はやむなくこれを選んだ」

と書いています。

一九四五年八月十五日の敗戦により、日本の青年が戦前の世界と断絶し新しい時代への参加を始めたように、彼も又生きる決意の書としての『仮面の告白』を、浪漫性を捨て古典的文体で書く状況を迎えました。（『仮面の告白』ノート）によれば、

「この本は私が今までそこに住んでいた死の領域に残そうとする遺書だ。この本を書くことは、私にとって裏返し自殺だ。飛込自殺を映画にとってフィルムを逆にまわすと、猛烈な速度で谷底から崖の上へ自殺者が飛び上って生き返る。この本を書くことによって、私の試みたのは、そういう「生の回復術」である」と。

以後彼は、彼の文学のひとつの芸術的完成である『金閣寺』へ向けて、同時に繁栄する高度経済成長長期の只中へと出発して行きます。

金閣寺焼失事件は、実際にあったものでした。昭和二十

五年七月二日、当時二十一歳であった林承賢の放火によって起こりました。かれは鹿苑寺（金閣寺）の縦弟で、自分の行為について、「火をつけたことを悪いとは思わない。金閣寺の美しさを求めて毎日訪れる参観者の群れを見るにつけて、私は美に對し、またその階級に對して、次第に反感を強くして行った……そのあげく悩む自己に解決をつけるため、社会革新の立場から實際行動に移るべきだと決意した」（朝日新聞）にはなっています。この金閣寺焼失事件については、小村秀雄が新潮の評論で取り上げ、「悲しい哉、現代は狂人に充ちている、彼は意志を病んでいゝる」「金閣寺放火事件は、現代におけるまことに象徴的事件」と書いていますが、三島もここに触発されて、時代と自己の内的要求を仮託させるに適したテーマを見出したのだと思います。当時の私の受けた大きな感動を思い返すことは出来ませんが、私も又その時代の雰囲気や敏感に反応していたのでしょうか。私の高校時代、文学少女だった仲間グループの中で、最も愛読されていたのに、サルトルやカミュの小説でありましたし、新しい時代の雰囲気は、戦前からの女生徒だけの静かな学園にも無縁ではなかったのです。

この数年で、三島の小説を、読み返すことになりましたが、学生時代からすると三十年を経た私が最も興味を感じたのは、『音楽』という小説でした。『金閣寺』は確かに完成度の高い秀れた芸術作品と認めますが、やはり青春文学

の枠を出るものではないという気がしました。最終場面の散文的に「生きる」という決意から、青年にとつて本当の人生が始まるのですから、ここで幕を閉じてしまふ『金閣寺』は、三十年経ってみると、やはり青春という一時期の枠組の中から、組み立てられた小説である、という感慨が起きるのです。

『音楽』という小説が刊行されたのは昭和四十年、三島四十歳で、この年には三島の晩年の作になる『豊饒の海』第一巻『春の雪』も刊行されています。『婦人公論』に掲載されたもので、当時私も確か二、三回は読んだ記憶がありますが、まとまったのを読んだのは四十五年以降になります。

婦人公論という女性読者層を意識して、エンターテインメント的な、非常に面白く、よく出来た読物ですが、作者自らこういった種の傾向の小説、昭和三十一年の「永すぎた春」から、「お嬢さん」「複雑な彼」などをエンターテインメントと呼びますが、彼の主流の作品の厳密な文体でなく、いかにも肩をぬいた気取らない、しかも彼らしい特色の作品ですけれども、最後の結末がめでたしめでたしで終るのですから、非常に悲劇的結末を迎る彼の作品からすると、やはり傍流として位置するものなのでしょう。

三島自身が音楽を嫌いなことは、『小説家の休暇』（評論集）の中に出て来ます。

（私は音楽会へ行っても、私はほとんど音楽を享樂することが出来ない。意味内容のないことの不安に耐えら

れないのだ、音楽が始まると、私の精神はあわただしい分裂状態に見舞われ、ベートーベンの最中に、きのうの忘れ物を思い出したりする。

音楽というものは、人間精神の暗黒な深淵のふちのところで、戯れているもののように私には思われる。こういう怖ろしい戯れを生活の論議にみかぞえ、音楽堂や美しい客間で音楽に耳を傾けている人達を見ると、私はそういう人たちの豪胆さにおどろかすにはいられない。こんな危険なものは、生活に接触させてはいけないのだ。

ということですが、『小説家の休暇』は昭和三十三年三十三歳、『金閣寺』の一年前に刊行されていますが、創作力のもっとも充実した黄金期という時期に書かれており、この中には後の三島文学に見出される観念が出そろっている、と今から見れば思えるものです。

小説の内容は、精神分析医の一人称形式で弓川麗子という若く美しい女性が訪れて、「音楽が聞こえない」と治療を受けるところから始まりますが、その魅力的な、不感症の女性に振り回されがちな、冷静な合理主義者の冴見医師は非常によく描けています。というのも、三島のこの小説は、精神分析の理論のみによってはなかなか割り切ることの出来ない、人間精神の深奥の謎を浮び上がらせるのがテーマの小説だからです。だから精神分析医の冴見は、滑らかな皮肉な扱われ方をしているのも当然ですが、同時に又いかにも人間的な一面をもった、共感の出来る医師としての成功もえているように思えます。婦人公論の女性向けの

小説として書かれたとしても、小説の創造には、作者自身の内的要求とは切っても切れない関係にあるのですから、音楽が嫌いだという三島の固定観念が、この小説を書くことの出発にあつたのは確かです。

音楽が聞こえないのは女性であり、音楽が聞こえないその理由は、弓川麗子が男性を愛することが出来ない不感症が原因である、といかにも、通俗的な精神分析の案内書に書かれている症例のようになっていきます。しかし三島に一体、音楽が嫌いだという固定観念を深層心理に刻みつけたもの、これが問題なのですが、三島は、「音はむこうからやって来て、私を包みこもうとする。それが不安で、抵抗せずにはいられなくなる」と書いています。しかし普通の人は、向こうからやってくる音に抵抗なく包まれて、音楽を楽しむものです。

小説の中では、作者は——精神分析医の冴見の手を借りて、弓川麗子の深層意識を辿り何故、音楽が聞こえなくなったか、いやそれを拒否しようとする抵抗の原因となるものを探り当てて行くことになるのですが、そこには弓川麗子自身が自分ではどうしても意識化することの出来ない、幼ない頃の兄との近親相姦的な体験があったのでした。そこに自分が気付くことにより、弓川麗子は、自分の心を解き放ち、音楽が素直に聞ける、即ち男性を愛することの出来る女性へスタートすることが出来るようになって解決します。

三島の幼児環境が、非常に特殊な状況であったことは、

よく指摘されていることです。簡単な年譜にも、生後六ヶ月で母親の手許から離され、病身の祖母の許で育ち、十三歳で両親や妹弟の家に帰った、ということが記されています。昭和二十三年の短編「椅子」によると、この頃の世界が、私小説風にハッキリと描かれていて、フィクションと思われていた『仮面の告白』の部分も、ほとんど事実であつたことを証明するようになっていきます。彼の全生涯と作品を見渡せる地点に立ったからこそわかるのですが、今となって何が『仮面の告白』であつたのか……と私は思つたのですが、昭和二十四年という当時の戦後価値観の強かつた社会背景も考えねばならないとしても『仮面の告白』としても書きえなかつた幼児体験が、そこには何かあつたのではないかと想像させてしまうものがここにはあります。

三島由紀夫は「私小説」には一切背を向け、西欧風のロマンスが本体であることを終始一貫として小説の信条として、その華麗な実験を行ったのが彼の作品、というのが周知の評価となっています。しかし、「私小説」は書こうとしなかつたにしろ、彼ほど自分自身を小説、評論、エッセイ、戯曲に語つた作家はいないのではないか、という気がします。そしてそれは、彼自身の社会という鏡へ向けて自分自身を確かめる自己存在の手段ではなかつたのか。言葉という不確かなものを生きる手段、目的として選んだ彼には、それがもう当然のことになるでしょう。

三島由紀夫の自伝的評論といわれている『太陽と鉄』の

中で、

「世のつねの人にとっては、肉体が先に訪れ、それから言葉が訪れるのであろうに、私にとっては、まず言葉が訪れて、ずつとあとから、甚だ気の進まぬ様子で、そのときすでに観念的な姿をしていたところの肉体が訪れたが、その肉体は云うまでもなくすでに言葉に蝕まれていた」

『仮面の告白』が生への決意であるなら、この『太陽と鉄』は、死への遺書とも言うべきものでしたが、一方、彼は壮年に達し、充実した幸福な作家的肖像と世上には与えていました。

しかし作家という生き方は、非常に困難な問題を、その宿命の中に含んでいるものでした。『小説家の休暇』の中で、

「今私が赤と思うことを 二十五歳の私は白と書いている。しかし四十歳の私は、又それを緑と思うかもしれないのだ。それなら分別ざかりになるまで、小説を書かなければよいようなものだが、現実が確定したとき、それは小説家にとつての死であらう。不確定だから書くのである。四十歳になって書き始める作家も、四十歳に達したときの現実が、云おうようなく不安に見え出すところまで書き始める。真の諦念、真の断念からは小説は生れぬだらう。

ブルウストはコルク張りの部屋に入つて『失われし時を求めて』を書き始める。それを一種の断念、人生に對

する決定的な背理だと考えてはならない。

小説を書くことは、多かれ少なかれ、生を堰き止め、生を停滞させることである」と書き、続いて

「小説家の問題は、かくて、われわれが生きながら何故又いかに小説を書くか、という問題に帰着する。もつと普遍的に言えばわれわれが生きながら何故又いかに芸術に携わるか、という問題に帰着する」

今から読むからですが、これは彼の人生の予言のように、いやもう限定された期間のように見えます。それから十年後に書かれた『荒野より』（昭和四十二年）の中では、こう書かれるようになっていきます。

「小説を書いて世に売るといふのは、いかにも異様な危険な職業だということをおは時折考えずにはいられない。私は言葉を通して、何を人の心へ放射しているのだろうか？ 芸術家はたしかに、酒を売る人に似たところがある。彼の作品には酒精分が必要であり、酒精分を含まぬ飲料を売るとは、彼の職業を自ら冒徳するようなものである。つまり酩酊を売るのである。」

「小説家の心は広大で飛行機もあれば、中央停車場もある。中央駅を囲んだ道路は四通八通し、ビル街もあれば、商店もある。並木路もあれば、住宅地域もある。郊外電車もあれば、団地もある。野球場もあれば劇場もある。そしてその片隅のどんな細路も私は通じており、私の心の地図はつねづね丹念に折り畳まれてしまっている。しかしその地図は、私がふだん閉却している大きな地

域について、何ら誌すところはない。私はその地域を閉却し、そこへ目を向けられないようにしているが、その所在は否定出来ない。

それは私の心の部屋を取り囲んでいる広大な荒野である。私の地図には誌されぬ未開拓の荒れ果てた地方である……私はその荒野の所在を知りながら、ついぞ足を向けずにいるが、いつかそこを訪れたことがあり、又いつか再び、訪れなければならぬことを知っている」

荒野とは孤独な狂気の世界を指しています。その予期していた荒野へ、三島は足を踏み入れることになったのだ。

一般には時代逆行的ともいえる後年の活動、二、二六事件を扱った『憂国』、自衛隊への体験入隊、「楯の会」の結成など、あの最期の総監室での自決まで続く荒野の只中への道だったのでしよう。

作家は結局、処女作に回帰する、ということが言われます。彼が十八歳の時の『中世における一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』を指して、「この短い散文詩風の作品にあらわれる殺人哲学、殺人者（芸術家）と航海者（行動派）の対比、などの主題には、後年の私の幾多の長篇小説の主題の萌芽が、ことごとく含まれていると言っても過言ではない。しかもそこには、昭和十八年という戦争の只中に生き、傾きかけた大日本帝国の崩壊の予感の中にいた一少年の、暗胆として又きらびやかな精神、その高揚がびっしりと書き込まれている」と言っています。戦後、作

家として生きることを志し、生と死との芸術家の宿命的な危険な綱渡りをしながら、自己の精神に次第に暗黒の部分を広げ、そのみかえりとして功成りとげた有名な作家としての地位を築く反面ではまた最初の終戦間際の孤独な、夢想的な、世界の崩壊を予期した終末観への回帰に、再び戻って行かなければならなかったのです。

一昨年辺りから、雑誌の特集を始め、単行本、新聞のエッセーなどに、にわか三島論が出はじめて、昭和六十二年は、オール読物の新年号の野坂昭如『小説三島由紀夫』群像の対談「三島由紀夫、日本人の自決」新潮の『豊蝕の海』解説などが見られ、今年の文学界新年号には野坂昭如、精神分析学者の福島章「三島由紀夫を遡る」を掲載しています。『音楽』で精神分析学とその価値を大いに批判した三島には腹立しいものかもしれませんが、その中で福島氏が

「へぼくなんかは商売だからどうしても病理のほうだけ見えてきてしまうのです。でもへぼくの問題意識は、どうしてもこれほど変った人が、これだけの名声を得て多くの読者を引きつけているか、その問題ですね。確かに今『仮面の告白』を読み直してみても非常に面白いし、魅力的なんです、でもどうしておもしろいのかへぼく自身はよくわからないのです。その後の『金閣寺』でも、あるいは『鏡子の家』でも、かなり病的な体験みたいなものを書いていきます。三島は、そういう病的な体験を普通の心理学的な理解に應用できるように解説しているとい

う感じは持ちますけれども、しかしそれにしてもこれほど狂気や異常を扱った人が、どうしてこれだけ多くの読者を持って昭和を代表する作家の一人として認められるか、その辺がよくわからないのです」

と言うことですが、精神分析学者の閉口したこの言葉は、三島には嬉しい賛辞に聞こえるのではないかと思います。これに対して野坂氏は

「昭和を代表する作家といえるかなあ。作品より生の軌跡に、昭和があらわれているような感じがします……つまり、彼は自分自身は何もないわけで、他者を少なくともとも認識できない以上、小説を書けるわけがない、小説以外の何か、戯曲もいかにもこしらえもので」と言っています。

私が三島の小説を今回読み通して、まったく残念に思ったことは、作品中の女性が生きた女性としての感触が感じられないことでした。以前よく読んでいた頃は、他の男性作家に比べて、女性が多彩に、実に魅力的に書けていると、一すいかにも表面は女性の心理が上手く纏んで書いてあるように見えますが、やはり三島の観念を作品として展開する役割だけに過ぎないように思えました。三島は「女嫌いについて」というエッセイで、随分こっぴどく書いています。女性を愛することはおろか、近附くことも恐ろしくて出来なかつたのではないかと考えることも出来ません。女はバカだからとか、子供の時分に、女の子の意地の悪

さとずるさと我儘に悩まされ、女ほどイヤな動物はないとか、女は男より低級であるとか、女はひろく芸術、文化の原体験を味わうことが出来ぬと……読む方は逆に冷静になり、何が本気なのか演技なのか、この悪口には、作者の方が仕掛けた罠があるのではないか、こっちの怒る反応を作者は楽しもうとしているのではないか、と用心深く、腹を立てたら損だという気持にならされます。

一体に彼の論法はわかりにくく、逆説的でドグマ的な印象のこともあります、今日でも現在の空気を呼吸しているように、文化主義一般への批評には、尖锐なりアリティがあります。一方では『金閣寺』などの秀れた作品を書き、宿命的な矛盾をはらむ文学と実生活との危険を綱渡りのようにバランスを取り、作家として芸術家として真面目に真剣に取り組んだ作品の軌跡を残した作家も少ないと思うのです。そこがやはり私の好きな作家の一人なのです。

